

全日本リコ研だより 第1号

平成26年2月1日発行 JRS編集人 小山内 仁



巻頭言

全日本リコーダー教育研究会
会長 牧野 光洋

全日本リコーダー教育研究会の会報が復活する。創立40周年を迎えた本教育研究会としては、この会報発行を新たな活動として捉え、「復活から継続へ」、さらに、本教育研究会の研究活動に勢いをつけたいものである。

前回の配付は、武蔵野音楽大学のベアターベンホールで第8回全日本リコーダーコンテストが開催された時(昭和61年度)だったと記憶する。その時の会報は、全国各地の指導者による「リコーダーの指導法」、「全国大会初出場団体(現在の徳山賞授与団体)からのメッセージ」、「各地のリコーダー事情」等が紙面を埋めていた。特に「リコーダー指導法」は、私にとって非常に有意義な学びの場であった。当時、手探り状態で指導していた私

は、全日本リコーダーコンテストでいろいろな演奏を拝聴し、図々しくも、演奏後に各地の指導者に駆け寄り、教を乞うたものであった。すると、異口同音に、「何も特別なことをしているわけではないんですよ」という言葉が返ってきた。

それを伺った当時の私は、そのようなはずがない、何か特別な指導や秘訣があるに違いないと心の中で決めつけていた。なぜならば「あのような素晴らしい音楽が奏でられているのに!」と思ったからだ。

しかし、この諸先輩方のご返答こそが、指導法のヒントであった。「何も特別なことはしていない」というのは、「基礎基本に徹する」ことを意味しており、「音を合わせる」「縦の線を合わせる」「リズムをしっかり」、そして何よりも「音楽を楽しませること」であった。この基礎をおろそかにして向上を期しても、大きな壁が立ちはだかるばかりだったのである。

今回、この会報が復活する。ぜひ、各地の指導者及びリコーダー愛好家の情報源として、有効に活用していただきたいものである。



「心の響きを奏でる」

東京藝術大学、横浜国立大学講師
審査委員長 吉澤 実

「Mino! 何故そこをそのように表現するんだ?」と師匠のニコラウス・アーノンクールから、レッスンの時よく質問された。当時ぼくはMinoruという名前からMinoと呼ばれていた。「この曲を作曲した頃のテレマンは、フランスへの旅行途中でいろいろな民族音楽を耳にして、ここは特にジプシーの音楽の新鮮な響きを書きとめてある。その新鮮な響きがここに欲しいな!」と師は語った。しかし、「Minoがどうしてもそう表現したければ、それはそれでいい…」とも言った。何度かのレッスンの後に気がついたことは、「何故かを知る」ことが音楽表現の「基礎」であることだ。

例えばバロック音楽の表現をあげてみよう。メヌエットは3拍子で書かれているが、1つのパッセージが6拍のステップで踊られる2小節単位の6拍子となる。また、メヌエットの語源は「小さなステップ」であり、1拍目はつま先立ちする上への動きのステップであるため、床を踏むような表現ではなく、そこにはその動きに相応しい音表現が必要となる。その踊りを実際に踊ることで、フレーズとアーティキュレーションが自然に生まれ、テンポも自然に決まる。時代とともに実際に踊らない楽曲としてのメヌエットが作

曲されるようになったが、メヌエットのキャラクター表現なしにメヌエットはメヌエットの演奏にはならない。それ以来ぼくは、自分自身の演奏に常に「何故そうするのか」と問うようにしている。

テンポと言えば、メトロノームは19世紀に発明されたため、Adagioなどと表記されている速度表記は17~18世紀のバロック時代のテンポとは異なっている。それではバロック時代のテンポはどのような速さであるのだろうか。イタリア語辞典でテンポ表記の語源を調べると、Adagioは注意深く慎重に静かてやさしさのある「ゆっくりと」を意味している。Largoは幅のある広く大きく豊かな「ゆっくりと」、Lentoは遅く緩慢でゆったりした時間を表す「ゆっくりと」、Graveは重圧があり苦しみ悩む深刻な感じの「ゆっくりと」である。これらのテンポを表示する言葉はもともと情緒を表現する言葉であり、同じ「ゆっくりと」でもそれぞれ微妙に意味合いが異なるため、情緒表現の工夫が必要となる。また、テンポもその表現に相応しい速さになる。

このように、「何故かを知る」ことは、演奏表現の「基礎」を養うことにつながる。そして、技術的な側面だけではなく「何故そうするのか」を考え、忍耐をもって楽曲に内在するものを発見し、愛情とともに音符のもつ「しぐさ」を見つけ、引き出し、実りある音にしていくことが演奏の醍醐味であり、音楽する喜びとなる。無論、答えの見つからない疑問も多いが、今出来ることを精一杯表現することが創造行為そのものだと思う。「息」という字が「自らの心」と書くように、「息」で生まれるリコーダーの演奏は、あなた自身の「心の響き」なのである。



「全日本リコーダーコンテストに 寄せて」

文部科学省教科調査官

大熊 信彦

今年3月27日に行われた全日本リコーダーコンテストで、私は「独奏」と「少人数によるアンサンブル」を審査させていただきました。小・中・高等学校、大学、一般の全ての皆様の演奏が、それぞれ個性や持ち味を十分に発揮された素晴らしい内容でした。聴き終えて、リコーダーの楽器としての魅力と音楽表現力の豊かさ・奥深さを改めて実感し、とても充実感がありました。

リコーダーを演奏するときは、響いている音の質感やピッチなどを常に意識しつつ、楽曲の特徴や声部の役割などにふさわしいタンギング、アーティキュレーション、息のスピードやその変化などの技能を、運指と一体的にコントロールする必要があります。身体的な技能とそれをバランスよく司る頭脳、そして、気持ちの面での集中力を総合的に働かせることが求められます。

また、音楽には、その音楽が生み出された時代や地域、

作曲家などによって、ある特定の表現上の特徴、すなわち様式があります。日々の音楽活動では、この様式を踏まえ楽曲を解釈し、前述した技能を高めながら、何よりも「演奏する人自身は、楽曲のどんなところに、よさや魅力を感じているのか」を聴く人に伝えることができるような表現を追求することが大切です。私は、この日々の追求こそが、音楽活動の喜び、楽しさ、醍醐味であると考えます。

リコーダーコンテストで聴かせていただいた皆様の演奏から、本番のステージの僅かな時間に、日々の音楽活動で培われた力が凝縮された質の高い精神的な喜びを感じました。スポットライトを浴びて大勢の聴衆の前で演奏する緊張感を乗り越えて、小学生から一般までの幅広い世代の皆様が、とても堂々と、音楽的には誠実に演奏されていたことに感銘を受けました。

学生の皆様は、どうか社会人になられても、ぜひリコーダーの演奏を続けてください。感情を音楽で表現し、伝え合うことの喜びや意義を忘れないでほしいと願っています。そして、生涯にわたり音楽に親しむ生活を築いてください。このことは、次の時代が、より一層心豊かな社会になることにもつながってくと考えます。

全日本リコーダー教育研究会をはじめ関係の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、リコーダーコンテストの益々のご発展を祈念いたします。



「全日本リコーダーコンテストへの 期待を込めて」

文部科学省教科調査官

津田 正之

私は、第34回全日本リコーダーコンテストにおきまして、小学校・中学校・高等学校と一般の部の「合奏」と「五重奏以上のアンサンブル」の審査をさせていただきました。一般にリコーダーは、ソロやアンサンブルとして演奏されるイメージが強いものですが、合奏においても豊かな音楽表現を生み出す楽器であることを、コンテストに参加した皆様の演奏から改めて実感いたしました。

リコーダーによる合奏において、それぞれのパートや楽器の音色の持ち味を発揮しながら、全体として調和のとれた美しい合奏表現を生み出すためには、曲の特徴や各声部の役割を各々がしっかりと捉えた上で、曲にふさわしい奏法を身につけて、互いの音をしっかりと聴き合いながら演奏することが求められます。どの団体の演奏も、そのことが見事に実現されており、すべての団体の演奏が、質の高い合奏表現をつくりあげていることに感動いたしました。

リコーダーは、日本の学校教育においてほとんどの子供が手にする最も身近な楽器であり、器楽表現の楽しさや喜びを深めるために、たいへん重要な役割を担っています。そして、生涯に渡って器楽表現を楽しんでいくことができる、幅広く奥深い表現力をもちあわせた楽器だと思います。小中学校の指導者の先生におかれましては、今後とも、子供と共に音楽を表現する喜びを高めながら豊かな音楽表現を追求されてください。また一般の皆様におかれましては、生涯を通してリコーダーを愛し、仲間とともに音楽表現を深める喜びを高めてください。音楽を通して、自己を表現するとともに他者の感情に共感・共有することが、心の通い合う豊かな社会の実現につながっていくと信じます。

本コンテストを主催されている全日本リコーダー教育研究会は、昨年創立40周年を迎えられたと伺っております。戦後の復興期に導入されたたて笛類から、現在使われている形態のリコーダーに変わった時期に創立された本研究会の歩みは、リコーダーが芸術楽器として学校教育や社会教育に普及し、発展していった歩みと重なります。今後も本研究会がリコーダー教育の充実・発展に果たす役割は大きいと思います。

最後になりましたが、本研究会をはじめ、コンテストに関係された皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、本コンテストがこれからも益々発展していくことをご祈念申し上げます。



「リコーダー ハンド イン ハンド」

リコーダー奏者

大竹 尚之

くちばしを持っていたり、甘く優しい音だったり、指穴が9だったり、鳥のように歌ってる笛、リコーダーを教育に使い始めて80年ほどでしょうか、このコンテストはその半分の歴史を持っているのですね。審査に参加させていただいてから30年以上経ちました。

その間、多くの惨禍、震災、大雨、暴風を体験してきました。

このリコーダーが教育の場で鳴らされ続けたことに、先生方への感謝と賞賛をお送りしたいと思っています。

思い出すことがあります。上、中越の地震が起った時多くの町村落が孤立し、学校は避難場所として救援に当たったことが報じられました。避難場所ですから、教育の場としては機能し難い事態が暫く続いたに違いありません。

その年のコンテストに出場された小学校がありました。全校生徒が参加されたことを、後から聞いたのですが20名ほどの子供たちは皆んな健康そうで、伸びやかな屈託のない表情、そう子供らしい仕草を持っていました。舞台上で目を引いたのはその学年構成です。

プログラムに学年表示は無いので推測ですが、6年生の大きな生徒と1、2年生かなと思えるほんとに小さな子供と一緒に楽しそうに吹いているのです。名前から、兄弟、姉妹た

ちが何組か出演していることが分かります。そうです、一時は閉じ込められた山の分校から生徒全員で練習し、予選を通過して全日本コンテストに参加してくれたのです。その練習の中で上級生が教え、下級生が学び、次第に音楽が一体になり、美しく響き始める。お互いが聞き合いながら、アンサンブルする喜びを分け合う、そのような音楽の原点を大切に守りながら作り上げたハーモニーがそこにあったのです。その演奏の素晴らしさは、質もさることながら、舞台に感じ取れる温かな優しさ、一人一人が手を取り合っている、その力強さな

のです。リコーダーを通して子供たちが学んだことは、これから生きていく上で大切にしなければならない様々な事だったに違いありません。そのための、音楽教育だと思えます。隣国台湾ではリコーダーコンクールの予選に1週間かかるほどリコーダーが浸透しています。そのレベルの世界的なものです。小学校の1、2年生から自由なクラブ活動としてリコーダーが広く、指導者のもとに取り入れられ、吹かれています。リコーダーの持っている楽器としての魅力、ソロとしてもアンサンブルとしても、もっと広く積極的に広めたいですね。



「コンテスト合奏部門を聴いて」

リコーダー奏者

田中 せい子

昨年に引き続き、2回目のコンテストの審査させて頂きました。どの演奏からも、練習の積み重ねによって得た自信と雄弁さを感じ、一音一音に込められた皆さんの思いはとてもダイレクトに心に響き、胸が熱くなりました。これほど高いレベルの演奏をされる皆さんと、それを指導される先生方には心からの賞賛を送りたいと思います。

演奏を評価する際私が基準としていることは主に3つです：①リズム、テンポの正確さを含めたアンサンブルの力、②音程の正確さ、③響きの充実。これらは外せない基本の要素であると考えています。

今回このグループも①の点は非常に高いレベルでクリアしていたと思います。これについては、皆さんの素晴らしさにただ驚くばかりでした。

②は各グループでかなり差が出た点だと思います。人数が多いほど音程は合わせにくくなりますが、大人数でもよく合っているグループも多々ありました。音程のよいグループは総じて、3和音において3度の音を純正に近く取っていました。和音の響きが非常に安定するので、この方法はとても

効果的だと思います。また、ソプラニーノやソプラノがソロでトップラインに置かれる際には、音程について細心の注意が必要です。

そして③の響きの充実、これも音程以上に差が出たことでした。リコーダーは吹けば音が出るため、すぐ曲作りに行きたいところですが、その前に、楽器がよく響くような息の入れ方をしているかをチェックして頂きたいと思います。響きの魅力に欠けるグループに共通だったのは、喉に力が入り、息で押ししてしまう傾向でした。力みのない息を流すためには、喉は固くせず、むしろ自然に開くようにし、常に低い声で歌っているようなイメージで息を流すことが大切です。高音域でも甲高いだけでなく低い響きも含まれるような音を出せると、それは他の音とよく溶け合い美しい響きを作り出すことにつながります。

今回合奏部門でたくさんの素晴らしい演奏がありました。特に印象に残ったのは、沖縄県の八重瀬町立具志頭中学校、北海道の札幌市立北陽中学校でした。両校とも前述の①②③の完成度が高かったことに加え、磨き抜かれた高度なテクニックを持ち合わせていました。そして具志頭中の演奏はほぼしるエネルギーに溢れ、北陽中の洗練された演奏には高い透明感を感じました。

日本にこのコンテストが存在することは、世界に誇れることです。ヨーロッパのどの国を探しても、これほど大規模でハイレベルなものはないと思います。出演者の皆さんにはこの経験を生かし、ずっとリコーダーを吹き続けてほしいと願います。



札幌市立北陽中学校 広瀬量平作曲 「高貴な猫」よりを聴いての 感想とアドヴァイス

大阪音楽大学名誉教授

北山 隆

大合奏となると2つの演奏形態がある。1つは指揮者が立つ。もう一つは演奏者の力量が自然に発揮されるよう指揮者をおかない。

おかない場合でも直前までの長い練習期間は指導の先生、言い換えれば指揮者の指導にあやかっているから、殆ど違いはないと思っても、やはり違う。指揮者のことを話し出すともう枚挙に遑が無い、それほど指揮者とは大きな、また魅

力的なポストである。となると演奏への賞賛は指揮者に、なのか演奏者に、なのか。そこには演奏者と指揮者とのコントラストがあってこそ、つまりお互いあつてのことなのでどちらと決めつけられないのだ。これを理解して次を読んで欲しい。

この演奏は、音の作り方、曲のまとめ方など不思議な魅力がある。音色が彩り多く、透明度があって、広がりはある。大きくないが質の良さをしっかり持った音色なのである。

曲が始まって、細かい連音符のパスセージの表現が機械的無機的で気になり、もう少し表現が欲しいと思うところを、音の魅力がぐいぐいと聴き手を引っ張っていく。しかも、いつの間にか表現に命の息吹をあれこれと感じさせ、堂々と終わる演奏に変化するテクニックがすごい。この先生の魅力を、いつも思うのだが、生徒達は70%ぐらいしか読んでいない。いや70%も読めるからゴールドに輝く。生徒達の力量もすごいものだなと思う。



奥深く幅広い リコーダーの世界へ

リコーダー奏者

本村 睦幸

全日本リコーダー教育研究会、創立40周年おめでとうございます。十余年過ごしたアムステルダムから日本に拠点を戻した2001年、全日本リコーダーコンテストの審査に初めて呼んでいただきました。それ以来十数回に渡って拝聴していますが、先生方の熱意あふれるご活動と生徒さんたちの活き活きとした演奏に毎回感じ入っています。

ご存知のように、リコーダーは、13世紀まで遡れる長い歴

史を持ち、中世、ルネサンス、バロックから現代に至るまでの幅広いレパートリーがあります。また非西欧の音楽語法も取り入れたような現代作品もあります。長い歴史と多様なレパートリーは、他の楽器にはないリコーダーならではの特長の一つです。リコーダーを学び楽しむということは、リコーダーを通して、多岐にわたる様式での演奏表現に親しみ、音楽観を広げていくことに他なりません。このような奥深く幅広い世界の入り口に立つ子どもたちは、未だ知らなかった様々な音楽に新鮮な驚きを感じるに違いありません。音楽とともに歩むこれからの人生の中で、その世界を探求することを、かけがえない喜びとしてもらいたいと思います。

その観点から、毎年コンテストについて申し上げるとすれば、音楽について高得点を目的として活動を組み立てるなら残念ではないかということです。そうではなく、未

知の様式に接して、試行錯誤しながらその表現を探り、音楽観を広げ、技術を高めて自分のものにしていく過程の繰り返しこそが大切です。様々な未知の曲に取り組み、難曲に苦労したり表現に悩んだりしている最中であれば、なかなか良い賞を取ることは出来ないかもしれませんが、その過程自体が素晴らしい体験です。わかりやすく聴きばえする曲を選んでそれだけに集中する方が良いと思ってしまうかもしれませんが、重要なのは普段の取り組みの質の高さであり、良い賞をとるためにはどうすればよいかということではなく、日ごろの音楽活動そのものを喜び多く感銘深いものにすることが第一です。そして、それが子どもたちの一生の楽しみとなって行くようなリコーダー教育を、これからも創り出していただけることを願ってやみません。また次の10年でどんな素晴らしい展望が開けるか、とても楽しみです。



《多彩な音色を》

リコーダー奏者

太田 光子

私は第33回全日本リコーダーコンテストから審査に参加させていただいております。今回は2回目の審査で、私は大ホールでの合奏及び五重奏以上の部の審査を担当いたしました。全日本に出場するほどなので、やはりみなさん素晴らしい先生方の元で本当にきちんと練習を積み重ねてきて、心をこめて取り組んできたのが、演奏を通してよく見えました。

そして、全国各地から集まってきた、リコーダーに一生懸命取り組んでいる皆さまの演奏をお聴きできることに、本当に幸せを感じております。まっすぐ心に響いてくる透き通った音を味わったり、目のさめるような鮮やかな演奏や、「この子がリコーダー奏者を目指したら楽しみだな」と思う演奏にも出会ったり。美しい音色を響かせてくれると大変嬉しくなりますし、一生懸命演奏している姿は、何かとても感動的なものがあります。

それぞれの団体に対しての講評はコンテストの講評用紙に書かせていただきましたが、コンテストの時には時間の都合上残念ながら一言、二言しか申し上げられません。そこで今回一番印象に残っております、三重県鈴鹿市立桜島小学校の「5つの黒人霊歌より」の講評をさせていただきます。

大人数であるにもかかわらず本当にきちんとアンサンブルが揃っていること、重厚で豊かな響きが印象的でした。旋律の奏で方に歌心を感じましたし、生き生きとした楽章でのリズム感や、スタッカート等アーティキュレーション

ンを効果的に使うなど、メリハリのある演奏が大変素晴らしかったです。

今後の課題としては、長い音の表情と、歌うようなフレーズの時のアーティキュレーションと息の使い方のバランスの工夫です。長いフレーズの時、タンギングがはっきりし過ぎて音と音の間の「区切れ」が多いとフレーズが途切れてしまいます。この場合、より滑らかなタンギングを用いるとよいでしょう。そのためには、ほんの一瞬だけ舌先で歯茎を掠めるようなタンギングを使ってみてください。息の流れを失わず、スラーよりもニュアンスのある、滑らかで美しいアーティキュレーションが出来る上り、ゆったりしたフレーズを歌い上げていくことができます。

それから、これは桜島小学校に限ったことではなく、全ての学校に言えることなのが、「音色」です。速い楽章もゆったりな楽章も、同じ音色で吹いていませんか？リコーダーの音色は一種類ではありません。息の使い方等のテクニックにより、曲の中のシーンに合わせ、表情豊かで多彩な音色を出すことができます。全日本に出場なさるみなさんは、ほとんどの団体が正確で揃った演奏をなさいます。これに「美しく、さらに表情豊かな音色」が加われば、本当に素晴らしいですね。

あともう一点、全体的に大変気になるのが「選曲」です。私は参加団体の選曲の傾向がかなり偏っているように思います。レパートリーは非常に幅広く、リコーダーの歴史とともにリコーダーの名曲は多く存在します。どのレパートリーに興味があるのかは、もちろんそれぞれの好みであり選択は自由です。ただ、特に子供たちにはリコーダーの奥行きが感じられるよう、多くの「良い演奏」に接し、歴史とともに歩んできた範囲の広いリコーダーのレパートリーに触れる機会を作っていただきたいです。これに関してはご指導なさっている先生方に切にお願い申し上げます。

すばらしい演奏、本当にありがとうございました。次回の皆さまの演奏も楽しみにしております。



全日本リコーダー コンテストに思う

リコーダー奏者

古橋 潤一

第34回全日本リコーダーコンテストに於いて、私は「合奏部門」「独奏・重奏部門」を聴かせて頂きました。

近年、どの団体も演奏のレベルが上がっていて、点数に差が付けにくく、審査する方としては嬉しいけれど難し

い状況になっています。

ただ、レベルにばらつきが無いということは、個性に乏しいという事にも繋がっています。皆上手いけど、パッと聴いただけで「これは素晴らしい！」と思う団体が少ないというのも事実です。例えば、僕が初めて審査に立ち会った頃は、曲に合わせて楽しげに体を動かして演奏する団体は殆ど無く、体の動きは単純に拍子に合わせて動いている団体が多かったのですが、そういう演奏をする団体が良い点数を取ると、最近は曲想に合わせて踊るように動く団体が増えてきました。

音楽を楽しめば、ある程度体が動くのは当たり前なのですが、コンテストというものの性質上仕方無いとはい

え、個性を真似るのは面白い事とは思いません。例えば選曲にしてもそうです。「良い点数を貰いやすい曲」みたいな選曲が増えるのは僕には楽しくありません。「私はこの曲が好きだから演奏している!」という気持ちが見える演奏に出会うとハッとします。

そういう意味では今年、カステッロのソナタ2番で出場してくれた方は、僕の印象にとっても深く残りました。「あ、ここは誰かのCDを真似てるな」とか、「ん?ここで他の人の演奏と入れ替えたかな?」みたいな違和感が多少ありましたが、それ以上に「私、この曲好きです!」という思いが伝わりました。

そもそも僕は、17世紀の音楽を主に演奏活動をしているので、カステッロやメルラなどの曲に関しては審査する時に厳しくなってしまうがちなのですが、その演奏は何故か妙に楽しめました。



ニュートラルを考えよう!

リコーダー奏者

吉澤 徹

コンテストに於いて審査をさせて頂く私達にも、皆さん演奏者とは違ったプレッシャーが有るものです。制限時間内に演奏の評価をし、助言とまではいかずとも美点を挙げ、ウイークポイントに言及しアドヴァイスのコメントをする。ここまでは良いのですが、それを小さな枠内に、漢字による語彙(これが一番大変)で書き連ねる。脳内ではもっと相応しい表現で指摘出来る事が、ひらがなでしか書けず何度歯痒い思いをした事でしょう。私は小編成担当でしたので次の方々の準備も即座にスタンパッているのに、まだ前の方のコメントを書ききれない、枠内のスペースが足らず書き直す等、まさに汗顔ものです。

今回このような機会を戴き、時期を異にして、再び皆さんの演奏を耳にする(しかも時間にとらわれず、漢字を思い浮かべる事も無く、時にはスコアを持ち出せる)と、実に色々な発見が有りました。個々の方々への発信では有りませんが、全体的に思う事を<ニュートラル>と云う概念で、参考までに挙げてみたいと存じます。

録音では、相対的に中学生と小学生の響きの力感の差が、しっかりと感じられる事に驚きました。これは当たり前ですが、管楽器のエンジン=人体、としての体格差でしょう。小学生で兄姉に負けない響きを作っているグループ(該当グループが良い賞を取っている事が多いのですが)は、例えば大柄なエンジンで吹くmfに対する、小柄エンジンの(常に)fと云う所でしょうか?そこで感じたのが、両者が同じポテンシャルとすれば、中学生の音はゆったりと豊かに響き、他方はアグレッシヴに表現している、と聴こえる事です。(勿論これは優劣ではなく、キャラクターと理解して下さい)これが、ニュートラルの設定と云う事だと理解して下さい。

ただし、この事が絶え間なく続く演奏は、ずっとゆったり豊かな音で続いても、全部が思い詰めたように緊張していても、聴き手の耳には一本調子に聞こえてしまいます。ニュートラルな響きのポテンシャルを例えば8(この8が演奏者の体格で絶対的に違っても)として、10に高めても音程が上ずる事無く、6にセーブしても音色の体幹が痩せる事無く、心で思うがまま気持ちのダイナミクスを上げる事が出来れば、体格に関係なく良

コンテストの場でこのような古い音楽を演奏するのは、多分とても不利な事だと思います。音の間違いや、当然すべき歴史的演奏習慣等がなされていないと、専門家の僕達には聴くのが辛い演奏になってしまう為です。

でも僕は、そういう選曲でコンクールに臨んでくれる人がいる事がとても嬉しいです。(こっそり心の基礎点を上げています)コンクールではあるけれど、いい点数、いい賞を取る事が目標の全てにならず、良い音楽を目指す事がいい点数、いい賞に繋がるというのが、僕の考える正しい音楽のコンクールのあるべき姿です。そうでないであれば、算数や漢字の書き取りで点数を競う方が意義があると思うからです。もともと正解の無いものに点数を付けているのですから、もっと審査員の点数がバラつくような演奏が多いといいなと思います。次回また、何組くらいの団体が僕をハッとさせてくれるのか。今から楽しみにしています。

い表現に繋がり、メロディーを物語のように語る事が出来るだろうな、と云うグループが数多く有りました。

ニュートラル、と云う概念ですが、上記音の圧力では:

高压安定→気合い先行の印象+全部聴くと音楽が平板
指の少ない音で音程がうわずる

低压安定→音の豊かさが乏しくなり、表現を「やらされている」感が出る。1オクターヴ内の音程が、低めにぶら下がるリスク。特に長調の気分が良い音程で出し難い。

声部のバランスでは:

上声優位→内声が無気力に感じられる+メロディーのサビで、効果が感じられない。

声部間のポテンシャルは所謂ピラミッド状の力感で、表現によって上声が踏み込み、意図的にバランスを変える事で表現を創り上げるのが理想だと思います。

その他具体的には:

テンポ

速い設定→楽器が鳴りきる前に次の音に向かい、リコーダーが喜んでいない感じ

遅い設定→演奏者の安心感が余計なビートやら重たい鳴りを作り、余分なイメージが乗ってしまう。

息そのものの速さ

速い設定→長い音の語尾で音程がうわずるリスク、全てのフレーズがサビのようになる。

遅い設定→長い音の語尾で音程が下がるリスク、全てのフレーズ表現がはっきりしない。

パッセージへの対応

難易度の高いフレーズ→

よくさらっている所だけに、意外にニュートラルに吹けている。

易しいフレーズ、テーマ→

所謂「ひま」な所は、かえってイメージの確定通り演出する事が難しいか、そもそもあまり(心の中で)時間を使って練習していない事が多い。

等が感じられました。練習の成果を。「ミスをしない」と云う事の達成感を持たれたグループは数多いのですが、もう一歩進んで、「思っていた事を楽しんで聴き手に伝えられた、一緒に楽しんだ」と云う達成感を得る為に、上記、ニュートラル、と云う概念に向かって考えてみるのは如何でしょうか?

全日本リコーダー教育研究会創立40周年記念式典 (兼第38回全日本リコーダー教育研究会全国研究大会「東京大会」)

この度、当教育研究会は、昭和47(1972)年11月25日に創立し、平成24(2012)年に40周年を迎えました。これはひとえに内外の皆様の長年にわたるご支援とご鞭撻の賜物です。心から感謝申し上げます。
昨年(2011)の11月23日にTERRATORIA(テラトリア)にて記念行事を開催しました。

第一部【記念式典】13時～13時45分

◇開式の言葉

◇会長挨拶

◇ご来賓代表ご祝辞

大熊信彦様
(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)

◇表彰・記念品贈呈

表彰者紹介

リコーダー教育勲功表彰…会長職にあった者

初代名誉会長 故 花村 大様
二代名誉会長 故 徳山 博良様
三代名誉会長 中澤 正人様

特別功勞表彰…副会長職にあった者

小原 惇様、原 田 彰様、
三木 貞夫様、影 山 建樹様、
橋本 勤也様、越 智 健一朗様、
仲本 朝昭様、皆 川 昌雄様、
森 嘉雄様

名誉会員功勞表彰

榊 正治様、諸 岡 忠教様、中 島 聰様、玉 利 敬三郎様、南 雲 照様、
門 野 フミ様、太 田 正明様、砂 川 徹夫様、八 幡 健一様、橋 本 研様、
近 藤 誠 二様

審査員功勞表彰

上 杉 紅童様、遠 藤 一己様、本 村 睦幸様、大 竹 尚之様、金 子 健治様、
吉 澤 徹様、吉 澤 実様、藤 田 隆様、古 橋 潤一様

リコーダー教育功績表彰

田 中 吉徳様、山 本 喜三様、宇佐美 博子様

永年会員感謝表彰

武 藤 敬子様(東京リコーダー教育研究会より推薦)
小波津 繁雄様(沖縄県リコーダー教育研究会より推薦)
前 田 英也様(新潟県リコーダー教育研究会より推薦)

団体感謝表彰

東 京 小作ばれいしょアンサンブル
東 京 アッリエーヴォリコーダーオーケストラ

感謝表彰(協賛各社)

全音楽譜出版社様、株式会社ヤマハミュージックジャパン様、トヤマ楽器製造株式会社、株式会社音楽之友社様、
株式会社教育芸術社様、教育出版株式会社様、株式会社鈴木楽器製作所様、有限会社スタジオリック様、
株式会社フォトクリエイト様、株式会社ミュージックトレード様、江戸川区総合文化センター様



第二部【記念講演会・記念演奏】14時～16時

◇特別功労者記念講演

・影山 建樹氏

「地域の伝統音楽とリコーダー」



・三木 貞夫氏

「手、指に障がいを持つ子どもにも目を向けてください」



・皆川 昌雄氏

「長岡リコーダーフェスティバルに思う」



・原田 彰氏

「楽しい音楽で豊かな人生を～心とからだの健康づくり～」



◇記念演奏

1. 小作ばれいしょアンサンブル

「おもちゃの兵隊の行進曲」

イエッセル作曲 大和田征編曲

「ノスタルジックエア&ジグ」 金子健治作曲

千と千尋の神隠しより「いつも何度でも」

木村弓作曲 金子健治編曲



2. パンリコーダーオーケストラ

「リコーダー四重奏のための

ずいずいずっころぼしわらべうた」

諸岡忠教編曲

「待ちぼうけ」 山田耕筰作曲 諸岡忠教編曲



3. アッリエーヴォリコーダーオーケストラ

「しゃぼん玉」 中山晋平作曲 牧野光洋編曲
「汽車のうた」 本居長世・草川信・大和田愛羅作曲
牧野光洋編曲
「My favorite Things」 R.ロジャース作曲 牧野光洋編曲



4. 即興演奏と水墨画コラボレーションライブ

吉澤実 (リコーダー、笛)
×
高橋全 (チャンバロ、クラヴィコード)
×
渡邊ちゃんと (水墨画)



第三部【祝賀会】

運河上レストラン WATERLINE Floting Lounge
18時～20時30分

◇祝賀パーティー



入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう！

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

- (1)正会員 リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者
- (2)研究会会員 各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体
- (3)会員 本研究会が開催する全国研究大会及びコンテストで参加資格及び出場資格を得た個人及び団体で各事業の申し込みにおいて別に定める会費を納める者
- (4)維持会員 本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体
- (5)名誉会員 本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。
(名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

- (1)正会員一人 = 3000円
(ただし研究会会員で登録した者は免除)
- (2)会員一団体 = 3000円
- (3)研究会会員一研究会 = 10000円

※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究

会が承認した研究会を指す。

※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。

(4)会費の納入は、毎年6月末日までに納入すること。(納入方法は別途定める。)

申し込み先

全日本リコーダー教育研究会

〒120-0022 東京都足立区立千寿桜堤中学校内

住所:東京都足立区柳原2-49-1

電話:03-3888-5081 FAX:03-3888-5082

http://www.zenrikoken.com/ Email zen.rikoken@gmail.com

編集後記

このたび、数十年ぶりに会報を復活した。創立40周年を記念し、改めて「会員への情報提供を！」との願いからである。

我が国の学校教育の場に、音楽が教科として位置付けられて、百年余りの歴史を築いて来た今日、その音楽科教育の発展は実に目覚ましいものがある。しかし、教育新時代を迎え、音楽教育も大きな変革の流れの中で、そのあり方が問われている。JRSは、音楽を愛好する心情を育むことは、リコーダーとの豊かなかかわりを通して、生涯を通じて音楽を愛好していく姿を目指している。恩師徳山博良先生の『祈りは実る』という言葉を受けて、教師はどんなことを祈りながら教育するのかということが大切だ。

音楽を教える者が、音楽を学ぶ者に、音楽の教科でしか成し得ないく生き(ようとす)る力>を与えたり、与えられたりする教科でなければならないと考える。

最後に、コンテスト審査員より御寄稿いただいたことを心からお礼申し上げます。